

029
384
1

一夜四堂告白

完



029
384
1



一夜叩嗟を齎端

秋の日の登りて我をいづる雨を
あきつる如きを窓の燈の中もなつるお
油をたかりたる幽居を敲て嵐山使の
病中をあきめんと百鬼夜行の如く
お我の心をあきかたの東坡居士の物好き
做りんとれれえは乃ち耳をたふ
はつて四嗟流行の如くあきよは

愛知女專
第 11822 號
圖書

一夜叩嗟

八子西

又記に海より来たかあつて狸程のしとも
ゆりしとて萩の昔とて中あまんとし 無為の
夕の秋をこころ高子の舟なまふ旅路
悲ひしとみよ捧押のそいふいとハ控を
て半色に似あつて調の同ハを
よれこひ服はみ打ちあつてまゝの菴
我のこ控位をけりの悲ひハ
比て海の波も虫のはるのわらうとて

堪へともあつておの控とて向をゆり
得ををぞと乱中もあつてふりてあつて
おの控も毛あひするはまをとおぬ乃
ハ我よとねもの之河をゆり遠の海は
やのまの白く去乃りやわつと例の狸森
あつてよと河をてしとて喰ひて切つて
よひ茶と豆餅の根籍あつてもりてあつ
たり控鬼あつて三更乃鐘をてあつ

四卷の身仙かろさ袖のしり帰りに
明るまのし打まのしりるしり
小判より引を柿の吉原のたをたよ
似るまのし何れをんむの人の初も
阿流を橋をとまのしりよおのし
まゆりし此をし題し引橋仙堂
ふねませせ

乳流 紫粒菴 蕪村 志ん

四歌仙其一

房かんつ萩やたのんけ通り 蕪村
卯より起る秋乃夕夕 標良
舟をてし宿とまのしり二日月 几董
紀行の挨拶一步 一愛 嵐山
也之り姫おまのしり頃あは 良
半蔀おまのしり雨の少れと 村

此方ありし弓強ゆき、此方のみ山
我もいそしみの春秋を志す 董
沖も既中意せしと古火桶打
是や〜蓮ハ核をあてなき 良
ハ鳥をさしつら昔のたつりお 董
さるるすけせし鳥、興女 山
あつる力不常陸介よ補給は 村
八重のさくろ乃鹿屯一片 董

矢を負し男鹿ましか伏見 良
昔もおく河さ月の山寺 村
大瓶乃酒りつり 酢す 董
五尺の釵赤あつをよる 良
蒲沖の多田の移徒り知よ 村
あつる末し 沖の白を 董
柳の枝と花のほ咲のこ 良
念佛して死せえり 村

我山より幸の魂 刻の心 董
おしと長露の体とて之に 良
錢なりし壁上の詩を歌ひ 村
灯を扱ひて 井 藤 一 董
異装よりくたさるるの雪 良
く ^新 子負てし石火 追々 村
早け田も ^{稲の} 伸 董
空の脈を無之る 月 良

小商人 秋の抄 此子 志安 村
相傘 せしと 姫子 たる 董
いも 今も たる 志安 良
何物 語り 秘して 見と 村
象傳の 乳 おもひ たる 暮 山
疾し 志賀の 山 村 董

其二

白藜子坐坊うう衣置得り 嵐山

残しややれりさの月乳 几董

借馬子 粧を涼しむる 標良

濃酒ありと婦のどけり 蕪村

小晴きとと浪々と獨の二所 董

る己手乃香炉手ちけり 山

かくて世に四位と成一 村

野上の居の色よ志つみ 良

中垣乃障子と蠅の二つ 山

ちのくも新トめととら 董

か紀僧をよみて去り 村

戎の亂ツもと 良

雪ふツて常子あはれ 山

於抄本唯よまの粧を 村

思ひあてふとれ出ると牛ふら
町とけりけり夜拍子の
散つれ花一時のたのしみ
雨を流して暮色きこ
春の川景園乃首こころを村
鼻しある宿老の知恵の
くくの沙汰とあるを我意董
小袖賣とも世をねよし

精をのゆり佛の高れん山
りつや切へて村廿二もと村
歌陣のあまの書物^を良
星の光の曉ちのく見ゆ董
片いとし舟出矣と失せらん村
心ゆきとて太刀をけくく、
けは雨かき風ん月あや
師の装ふこころ山程乃秋良

喰むや百里届——仙も科を山
掃一際 仕立をさうさのサの娘 村
物 翁よ公の孫さるる翁 良
花 不言 春 深 よ 非 董
人 老 人 又 我 を 老 村
泥 よ 屋 を 行 龜 の 子 良 村

其三

意とどして柳をのく船流 几董
離とどして又蝶を依竹 蕪村
のとこのふ蒼翁とを位持て 嵐山
芥のふとさかると 實飛る 摺良
よ記程と夜ハ志つる 七男と 董
虫乃 送ひの沙汰の道く 山

古飯秋のふらふら録八して村
高きうりー登り物思ふ力の董
あらし水や虫の鬼道たう良
きくきく虫思ふをまもつた村
用のとてをみし知恵の鐘山
羽黒の鷹の獲へるまら良
半弓の海より強ふた地へ在て董
官袴の行俊赤目す我たり山

垣茂よ麦うーくく權ぬのう村
枝のまゆまゆ糸の白妙董
飛風の筑紫ちりきんのはら良
ひとり香きく花へをまらへ村
かぢりの中のものおま子の山
谷の惜しむらへおけりうら良
鳥追はまらうの衣物良
良家の恩よ不のうらかた村

其甲

標良

花好のまのまをりし たぶらひき

つとし 卯木の垣の山 以 嵐山

摺師の獨居の所におる孔多 蕪村

既 満ちて孰連取 一折 以 董

煤竹よナ三口のまはり 以 山

鹽を抄ある 門口の牛 以 台

いかにして 菘のはげを連々 董

去舟の長者の 難くくわく 村

雨をんらよよ 枯る枯木 良

重具の皿は 鉄行て 以 山

わらはれ 一 方と中 婦は 村

又心して 志のま 雷のら の月 董

上加養の 水廻り 以 山

秋り中 なる 琵琶の音 以 良

白綾の袂うきせしつんき居に 董
くしつゝ宇佐の神無羽し 村
きひしよや 瓢箪あふてく 雨 良
瓶 瓶んとし出る 芦乃家 董
黍園子三日の糧とらん 村
柳女を限り昼のよも 良
鍼立のまよ 砂を恋衣 董
をたつゝも 猫のあんな 村

ゆゝくと 庵の末鍼よ 風の音 良
新聖霊の給仕 董
能作名秋の曇りのゆ 村
月を晴の旅の宿 官
世のうへの人のは 董
頭 ありて 村
銀の銭ももち 良
長きしよの 軒のま 雨 董

かくとらも成でも籠の匂を村
母の刺髪より下あらん良
啼鳥我もさのり我好良
きりの街をふ流北去良
巻よりゆき柳子鑽り鎌の村
主客の膳 長閑とらり 執筆
安永癸巳九月發行

蕉門書林

蕉舎太兵衛梓

京三茶通寺町五丁

